

追憶記

石川県 奥村 幸作

国後乗艦

昭和十五（一九四〇）年十一月、小雨降る舞鶴軍港埠頭で、出迎えの短艇に同僚と共に乗艇、生まれて初めての艦内生活が始まる。艦は艤装を終えて間もない軍艦「国後」である。航海学校普通科信号術練習生を卒業して、いよいよ配属先が発表された。

当時、軍艦「国後」とはいかなる軍艦かと心弾ませながら赴任したものの、呉や横須賀で垣間見た「大和」や「武蔵」の大艦とは違い、「国後」の僅か千トン足らずの勇姿に一層の闘志が沸いてくる。

乗艦して間も無く横須賀に回航となった。途中たまたま低気圧に遭遇し、長い陸上の生活に慣れていた我が身は、船酔いで相当にこたえた。そし

て次々に襲いかかる怒涛に翻弄ほんろうされる小艦艇の味わいを十分にたんのうする航海であった。

かくして昭和十六年春、南シナ海の海南島で行動し、同年十月内地へ帰港、鶴見造船所に入渠にゅうきょした。

臨戦準備

間も無く鶴見造船所での整備も終わり、横須賀に帰港して大湊に入港、ここで臨戦準備を完了して、ここからは一路北上を開始した。この間、日々気温は下り、つい先ごろまで猛暑の熱帯地方より帰還した体には相当に応える。

十一月初め、北海道の小樽港や厚岸港などに寄港して、生鮮食料を満載して北上、やがて千島列島の択捉島の単冠湾に入港となった。初めて見る北海の景色、寂寞とした湾内、岬々とした山々、雪に覆われた島の風景には、縹渺ひょうびょうとした北海の果てには何の潤いもなく一抹の寂しさを感じる。

開戦

連日の荒天、縹渺とした湾内に一艦また一艦と、

戦艦「陸奥」を筆頭に空母六隻、さらに巡洋艦等々、我が日本海軍機動部隊の精鋭が続々と集結し、その威容はまさに圧巻であった。

我が「国後」は哨戒艦として任務に就く。機動部隊の隠密行動が、他に察知されることを防止するため、付近海域を哨戒し、特にソ連の艦船の近づくことを厳に警戒し臨検等を行った。やがて十一月二十九日ごろより機動部隊は次々と出撃、「国後」も北方海域へ向かって北上し、十二月八日未明、艦長久保田智海軍大佐（後日、艦長交代して北村当美雄大佐）の「米英蘭との開戦」の旨の訓示があつた。

一方、先の我が機動部隊が「現在、ハワイ島、オアフ島等を空襲中」との発表があり、乗組員一同、武者振るいをしたものである。

国後退艦

北方行動に従事すること十四カ月、真冬の北海道の越年を経験し、横須賀海軍航海学校へ高等科気象学練習生として入校するため昭和十八年一月

に「国後」を退艦した。思えば北洋の哨戒任務は筆舌に書き尽くせぬ辛苦の連続であつた。

毎日、昼夜を問わず荒天している海、いかなる海の猛者共も飽き飽きの連日、東はキスカ島やアツツ島、ダッチハーバー海峡等々、西緯一七〇度線より北緯五〇度線付近の海域は、「国後」の行動範囲であつた。

北千島といえは十月より翌年五月ごろまで悪天候の連続である。一週間のうち五日間は悪天候である。低気圧の墓場といわれており、後の二日間は静かといつても、風速計はいつも一二、三メートルを示している状況である、

思い出の中に風速六〇メートルを経験したり、随分と危険なこともしばしばで、僚艦のマストがうねりの谷間に入った。見えなくなり、そのうねりの大きさも想像され、また艦の傾斜が片舷四五度近くにも及んで、本当にこれが最後かと覚悟を決めたこともあって、今となっては懐かしい思い出となっている。

龍田乗艦

昭和十八年八月、海軍航海学校高等科氣象学練習生を卒業し、一旦、舞鶴海軍航空隊を経て、巡洋艦「龍田」に配属となり、赴任のため呉へ向かった。しかし呉では既に「龍田」は出撃後であり、巡洋艦「熊野」に便乗してトラック島へ向かった。

ところがここでもいるはずの「龍田」は内地へ向かった後であり、同島の警備隊へ仮入隊の羽目となった。このままでは、容易に警備隊よりは抜られない様子が伺われたため、各方面へ種々交渉の結果、折りしも空母「翔鶴」に便乗を許され、ようやく一安堵した。

やがて横須賀に無事入港、舞鶴海兵団を経て、再び呉軍港にたどり着き、ようやく「龍田」に乗艦できた。この間、約一カ月間を費やしての乗り組みであった。

輸送船団の護衛

昭和十九年三月十一日、木更津沖を抜錨、輸送船団と護衛艦艇を含め総数約二十隻の大船団を組

み、一路トラック島向け堂々の出撃であった。

しかし輸送船の船足は遅く、僅かに六ノット、我が乗艦「龍田」の前部檣塔しやうたうに翻翻はんぱんと翻る司令旗にも何か一抹の不安感が伺われたが、はるか水平線にまで連なる大船団には一応の威容も感じられる。

しかし折から相模湾を出た直後から敵潜水艦の追跡が始まり、敵潜水艦同士の隊内電話が暗号でなく生放送で入る始末で、手ぐすね引いて待ち構える敵潜水艦の様子が次々と入る報告が想像される。そして、この大船団の前途多難が想像され、対潜水艦警戒のための「之の字運動」をしながらの航行も、このような鈍足船団では敵潜水艦にとつては絶好の餌食のほず、護衛艦の苦労は大変なものであった。

しかしその夜は、どうにか敵潜水艦の巢窟も突破し、十二日の夜明けを迎え、やや安堵した。しかし敵の潜水艦に対する情報は、ますます多くなり、見張りと警戒は一層厳しくなる。

龍田遭難

翌十三日の夜半、見張り当直中、右舷真横約二百三十メートル付近で、一瞬夜目にも白く飛沫を上げた魚雷らしき尾を発見した。「雷跡らしきものの右九〇度近い！」と報告と共に、航海長の転舵の処置が取られる。しかし及ばず右舷中部主機関室辺りに魚雷一発が命中、轟然と赤い炎が吹き上がる。遂に米潜水艦「サンドランス」の餌食となり、やがて高々と昇っていた紅蓮の炎が夜目にもはつきり、ドス黒い海水に代わり崩れ落ちてくる。甲板に叩きつけられた、目にはただ炎の色が青白く、やがて赤く映っていた。

そのうち艦内は停電し、漆黒の闇となった。艦橋では司令官や艦長の指示が、次々と矢継ぎ早に伝達され、ややあつて浸水もようやく少なくなり、適切な応急処置により、その痕も沈没するまでの数時間を持ちこたえた。

第十一水雷戦隊司令部が駆逐艦に移乗し、再び船団の最先端に駆け去っていく。

艦橋では各科より情況報告があり、前後部に敵魚雷三発が命中したにも拘わらず、戦死者は、僅か三人と記憶しており、艦橋でも、あのような爆風にあおられたが負傷者もなかった。しかし後刻、艦の沈没時の死傷者は三十人程度といわれた。

「龍田」の被雷後、ややあつて、はるか離れた地点で爆発の轟音があり、赤々と炎を吹き上げながら逆立ちして沈み行く大型輸送船がある。ようやく夜明けも近い付近の海域には、まだ敵潜水艦が潜んでいることは明らかで、駆逐艦は懸命の索敵を行い、こと思われる海中に爆雷攻撃を集中している。やがて浮き上がる油膜を確認して船団の後を追ってゆく。

敵潜水艦の跋扈する海域にただ一隻漂う「龍田」、しかしやがて被雷から数十時間を経て、懸命の努力にもかかわらず、急激に右舷の傾斜が始まり、遂に艦長の「総員退去！」の発令となった。

乗組員は傾斜の甚だしい艦腹を走り、次々と春未だ早い太平洋の冷たい海中に飛び込んでゆく。

寒い気候であるため、肌着を十分に着込み、外套や靴まで身に着けての海中への飛込みである。

この地点は八丈島西方六十マイル、「龍田」は艦首を上を持ち上げ、艦尾より轟音とともに水蒸気を吹き上げながら海中に沈んでゆく。

誰からともなく重油で真っ黒になりながら、体を「龍田」に向けて「海行かば」を歌う声が、あちこちの波間から聞こえる。皆「龍田」に敬礼しながら、片手で泳いでいる。

数時間もたったころ、呉から駆けつけた駆逐艦に救助され、横須賀海軍砲術学校に収容され、その後、舞鶴海兵団へ帰った。

厚木海軍航空隊と終戦

昭和十九年四月、厚木海軍航空基地、第一〇八一航空隊勤務となった。やがて米軍の空襲が始まり、戦闘激化と共に部隊の一部が霞ヶ浦派遣隊として土浦に進出した。これに参加して約半年で終戦を迎え、ここから復員となる。

顧みて、我が海軍生活は、大東亜戦争遂行に際

して、艱難辛苦、ようやく仕上がった最も使いころの兵隊であったと、自負している。

しかし我が戦友の多くは、ただ祖国を守るために南溟なんめいに、また北洋にと崇高な精神で散華していったことを思えば、今日、このような幸多き日々を送っていられることが、ただただ感謝あるのみである。

【解説】

筆者は大正八（一九一九）年七月、富山県婦負郡宮川村生まれ、当時の家族は、祖父母、父母、姉二人、筆者は男三人の次男であった。

昭和十五年一月、呉海兵団に入団、同十一月、海防艦「国後」に赴任する。

海防艦「国後」は昭和十五年十一月、日本鋼管の造船所で竣工、舞鶴鎮守府、大湊要港部などに編入され、同十六年十一月、単冠湾に到着、太平洋戦争開戦時の機動部隊入港に備えての地域の移動哨戒の任務に従事する。十二月八日の開戦後は、

津軽防備隊として津軽海峡の海上交通の保護に従事している。

筆者の乗艦したのは「国後」の艤装を終えて間もない時期で、以降、太平洋戦争の発端となった連合艦隊の単冠湾集結の哨戒任務を体験している。

「国後」は、以後、千島方面防備隊となり、千島方面海域の防衛任務に付き、さらに昭和十七年六月、アリューシャン攻略作戦に協力、同十八年のキスカ撤収作戦にも参加している。

筆者は同十八年二月、航海学校高等科気象学に入學、同八月、同練習生を卒業して、今度は、軽巡洋艦「龍田」に配属となる。

軽巡洋艦「龍田」は大正八年の完成で、基準排水量三、二二三トン、一四センチ砲四門、五三センチ魚雷発射管を六門を備える巡洋艦であった。

太平洋戦争開戦時の「龍田」は、僚艦「天龍」と共にウエーク島攻略作戦、ビスマルク海戦、ラエ・サラモア上陸支援作戦などソロモン海域での作戦に従事している。

筆者の乗艦した昭和十八年の四月、「龍田」は第十一水雷戦隊の旗艦となつて、内地にあつて教育訓練に当たっていたが、以後、戦局の逼迫により、昭和十九年二月以降は、体験記にもあるように、トラック島方面への陸軍部隊の輸送に当たっている。

この輸送作戦時の三月十三日、木更津沖を出航、八丈島西方四十カイリに差し掛かったとき、米潜水艦「サンドランス」の雷撃を受け、体験記に記されたように、流れた重油で真っ黒になりながら、体を「龍田」に向けて、「海行かば」を歌う海軍軍人の姿が描写されている。